

宿縁

四月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派 中原寺

TEL 〇四七―三七二一〇二九二
FAX 〇四七―三七二一〇二六二

自分のなかに 自分の知らない 自分がいる



いま、将来の日本を担う子供たちの減少が著しく、大きな社会問題となっています。つまり少子化対策です。今年四月一日から「子ども家庭庁」ができることが報じられています。

主役は子ども・若者のみなさんです。子ども家庭庁は、「子どもまんなか社会」の実現に向けて、子ども・若者のみなさんの視点に立って取り組む、ということなのです。

そこで私たち一人一人も他人事とせず自分の意見を述べ行動してゆくべきでしょう。

私にとって折につけ思い出す一つの句があります。

それは歴史小説家として著名な吉川英治（1892～1962）のわが子誕生のときの歌です。

やよ赤子 なれははずちの旅をへて
われを父とは生まれませし

そしてこの歌を詠んだ心境をこう添えてあります。

・加弥子生まれける日に。
・仏教に父母未生前のいのちの不思議を説けり。

「前世」ということを、仏教語では未生前（みしょういぜん）ともいって、禅の公案のなかに「父母未生前」を、問えというのがあります。夏目漱石が鎌倉の円覚寺で参禅をしたときに与えられた公案がこれであったと聞いています。

先の歌を解釈してみると、
「なんとまあ可愛い赤子であろう！

おまえは前世において、どのようないのちを経めぐってきて、この私を父として只今生まれてくださったことよ」

ここには単に我が子として誕生したというような浅いものではなくて、前世の不思議な因縁によっていま人間界に生まれ、それも私を父としてお生まれいただいたのか言いようがない吉川英治の感動が読み取れます。

仏教の深い生命観を通し、いのちの不思議に頭が下がる敬いを感じ出しています。自己中心の自我を主張する昨今の風潮は、政治に社会に家庭に蔓延し、そのひずみは目を覆いたくなるばかりです。

それらの原因は、消費社会、物質主義、高度経済主義、学歴社会等々とあげつらつても仕方ありません。

冒頭の「子ども家庭庁」なるものが生まれ、「子どもまんなか社会」の実現ということに思いを巡らせていた折、ふと目についた一冊の本がありました。「母という呪縛 娘という牢獄」（齋藤彩著―講談社）のタイトルと「執着がもたらす絶望」という文字に引き寄せられて早速読んでみました。

小6で父は別居、母娘二人の生活に。娘が私立中学に入学すると、母は娘の目標を医学部入学と設定。言葉も行動も異常となった。「何でこんなことが分からないの？」と詰問し、「嘘付き」「バカ」と罵倒する。やかんの熱湯をかけてやけどを負わせたり、回し蹴りをしたり、日記を盗み読みして娘の行動を把握し、娘が逃れようとすれば探偵を雇っても連れ戻す。

何年も受験を押し付けられ、強烈に束縛される日々。娘は「死んでくれたらいいのに」と考える。9年後に合格した大学で娘にとって「解放される」はずだった。だが、些細なことでもその思いはくじかれ、娘は絶望的な感慨を抱く。「誰も狂った母をどうもできなかつた。いずれ、私か母のどちらかが死ななければ終わらなかつた」と。

5年前に実際にあったある殺人事件を、当時記者だった著者は娘が控訴審で公表した

文書にあった「母の呪縛」という言葉に興味を覚え、娘に面会。やりとりした手紙を中心に母娘の長き「呪縛」を解き明かしたノンフィクションです。

息苦しさや絶望感。読み進むうちに、つらい感覚にとらわれながら、仏教の根本の教えである「縁起」を考えずにおれませんでした。「縁起」とは、あらゆるものが相互に関係しあつて存在していることですが、個人の独立した人格という観念に陥っている現代人には肯きにくくなっています。しかしこの本に登場する母親も娘も犯罪も決してこの人ただけの問題ではないことがわかります。

つい私たちは表面的にしか物事を見ませんが、無数の複雑な関係が絡み合っていることなのだと思ふべきでしょう。誰もが世の不条理を嘆き、直面する苦しみや不安は、その原因が明らかになれば、苦でなくなり、不安も解消されるでしょうが、その原因を尋ねてゆくと決して一つではなく、多くの原因と結果が複雑に絡み合っていることに気づきます。しかし私たちには因果の関係をすべて見通せる智慧など思いも及ばず、解決できない苦しみや、不安を持ったまま生きるのが、わが人生ということになります。

しかし「縁起の視点」に立つことの心が育てられれば、少しずつでも他者への思いやりとか、やさしさが生まれると思います。考えてみれば何事も対立しているものなどなく、相互依存にあることを知ればお互いを敬い合う世界が開かれます。不思議とは不可思議という仏教用語ですが、何事も人間のはからいを超えた真実からの戴きものと受け取ることが仏道を歩む人生道です。

【寺灯雑記】

○東京教区仏婦連盟の研修会に参加

3/1

築地本願寺にて東京教区仏教婦人会一日研修会が開催され、中原寺から二十一名が参加しました。

宮城県石巻市称法寺の松山善洋師より「私が見てきたこと〜震災4年後からの称法寺〜」とのテーマで講演があり、地震発生から復興までの様子を、スライドを使って説明いただきました。

日頃から非常時の知識を学び、備えをしておくことの大切さを痛感しました。

○桜開花宣言の下、宿縁廟・彼岸会法要

3/21

今年例年以上に桜の開花が早く、境内の枝垂れ桜もピンクに色づくなか、宿縁廟法要と彼岸会法要が営まれました。

今年新たに十名のかたが宿縁廟に納骨され、廟前にて「讃仏偈」をお勤めし、先立たれた方を偲びお焼香をしていただきました。

その後、本堂での彼岸会法要は参詣者とともに「仏説阿弥陀経」と仏教讃歌「衆会（しゅうえ）」を唱和し、阿満利磨師より「私と念仏」と題したご法話を聴聞いたしました。阿弥陀如来のお救いのおこころと道理を知ることによって、このいのちが救いの真つ只中にあることをお聞かせいただきました。初めて法要に参加された方からも「阿満先生のお話に深く感銘を受けた」とのご感想をお聞かせいただきました。尚、講師の阿満先生の著書『歎異抄入門』

無宗教からひもとく』（河出新書）はとても分かりやすい本なのでお薦めします。

○ご寄進

お仏飯米 浜根健一様
有難く御礼申し上げます。

○市議会議員選挙に石原みさ子氏推薦

任期満了に伴う市川市議会議員選挙が来る4月23日（日）に行われます。今期4期目を期して当寺門徒の石原みさ子さんが出馬しますので皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

【仏事Q&A】

Q、ロウソクに火を灯すのは、どのような意味があるのですか？

お勤めを始めるには、まずロウソクに火をつけます。これはお寺の内陣やお仏壇の中を明るくするために行うだけのものではありません。灯明（とうみょう）を仏前にお供えするという意味があります。灯明は、すべての闇を打ち破る光明にたとえられます。その光明とは、阿弥陀如来のすべてのものの真実の姿を明らかにする智慧（ちえ）と、光あふれる浄土をあらわしています。親鸞聖人が著された「正信念仏偈」（「正信偈」）には、「煩惱障眼雖不見（ぼんのうしょうげんすいふけん） 大悲無倦常照我（だいひむけんじょうしょうが）」とあります。私たちは、貪りや怒り、愚かさなどの煩惱によって絶えず心身を苦しめられてい

ます。その煩惱が自らの眼（まなこ）をさえぎって、真実の光明を見ることができないと述べられています。しかし、阿弥陀如来の光明は、このような私たちを救わずにはおられないと、常に大いなる慈悲の心をもって照らしてください。

【四月の法座・行事】

◎子ども花まつり（釈尊降誕会）

※四月二日（日） 十時三十分〜

子どもたちとお釈迦さまのお誕生日を賑やかに祝いしましょう。
仏さまのお話、「マーブルチョコ」さんのダンス、リース作り等々お楽しみがいっぱい、ぜひお子さま、お友達を誘ってご参加ください。おみやげもたくさん用意してお待ちしています。



◎婦人会法座

※四月二日（日） 一時半

御文章三帖第六通 前住職
*歌と座談会

◎壮年会法座

※四月二日（日） 一時半

御文章二帖十一通 住職

◎子育てサロン（パンダっ子）

※四月十日（火） 十一時〜二時

◎入門式

※四月十六日（日） 十二時半

入門式は新たに当寺とご縁を結ばれた方が、浄土真宗門徒として受式していただく大切な門出となるものです。

◎常例法座

※四月十六日（日） 一時

法話 熊原博文師（戸田市正善寺）

◎親鸞セミナー（浄土文類聚鈔を学ぶ）

※四月二十二日（土） 二時

先月から親鸞聖人の著書「浄土文類聚鈔」の味わいが始まりました。立教開宗の根本聖典とされる「教行信証」の要点をわかりやすく著されたといわれる「浄土文類聚鈔」を一緒に学びませんか。テキストはお寺で用意してあります。

◎お仏具磨き・清掃奉仕

※五月六日（土） 午前十時

【今月の掲示板のことば】

敬いを知り
手を合やす人は
国の宝なり